

年頭所感



— ほっかいどうは日本の頭 —

芽がでてきた地方の力

(社)日本技術士会 北海道支部長
技術士(応用理学/総合技術監理部門)

大島 紀房

明けましておめでとうございます。昨年から新年にかけて、私たち科学技術者に係る大きな話題が幾つかある。胚性幹(ES)細胞論文捏造事件は世界の科学者を、耐震強度の偽装事件は日本の技術者を震撼させた。どちらも今倫理問題の話題の一つとなっている。しかしこれには疑問である。ES細胞の存在が僅かの可能性でも立証できるのなら、耐震強度も限りなく安全率を1.0に近づけるための鉄筋減らしなら倫理問題として取り上げられようが、捏造そして犯罪ときたらそんなレベルの議論ではない。

北海道の話題。歳出削減から公務員減らし、開発局は名指しで登場するし、道庁も果敢な人員削減を打ち出す。さらに道路特定財源の一般財源への移行。こちらも暗い話題が多い。

私は以前から日本地図を眺めるたびに、少し斜めに構えた人の身体を思い出す。北海道が頭部、東北・北陸は胸部、関東・中部・近畿は腹部、中・四国・九州は脚部。頭部の北海道は明治以来日本が困窮する「人口吸収」「食料供給」「資源開発」を無口で人の良い性格で優しく受け入れる。胸部の東北・北陸は「美味しい米・穀物・酒」を造り出す。脚部の中・四国・九州は隣国のアジアに長い脚を伸ばして「輸出入」で活躍する。一方腹部の東京・名古屋・大阪は「巨大な胃袋・腸」となり消化、消費をつづける。つまり大都市圏は消費都市として、地方圏は生産・製造都市として日本人は豊かな生活を享受できたのだと思う。

昭和39年オリンピックの年に名神高速道路、続いて東名高速道路、消費都市の東京—名古屋—大阪に

メインエンジンがうなり、経済誘発効果を発揮してGDPが急上昇。この経済効果によって潤った金で地方を整備するとの約束で高速道路は「全国プール制」を開始した。ところが、である。北海道まで高速道路ができない内に財政が危なくなってきた。北海道民は前払いで自分達の税金を大都市圏に投資した。人の良い道民はやっと「北海道まで来る」と大きな期待を寄せていたのに。

しかしよくよすることはない。今こそ「北海道は一つの地域」として立ち上がる絶好のチャンスである。何ととっても食料資源、観光資源、バイオ資源、そして豊かな自然環境がたくさんあるのだから。

「北海道が一つになる」元気の活動がどんどん芽を出してきている。この度、1月16日に発足した「みちネットの会」に私も参加させて頂いた。高速道路網の立ち遅れている道東、道北、オホーツク、十勝、道南の民間ボランティア団体が一体となって観光、物流など地域の発展と日本、世界への貢献を目指し早期の開通を願うものである。私たち技術士活動グループが活動を続けている「社会貢献」と極めて共通しており、深い感銘を受けた。

最後になりますが、科学技術者の果たす役割は「国民の安全で豊かな生活」。今技術士会もビジョンに掲げて行動計画を実行中です。このためには(社)日本技術士会の組織(本部と支部、部会)の抜本的な改革と充実、会員数の増大が必要不可欠です。道内においても支部とセンター、地方協議会との役割を見据えた改革のスタート元年にしたいと考えます。

本年もよろしく願い申し上げます。